

=====
 証明の要点 (全空間における NSIVP の時間大域可解性の時間変換解析)

時間大域可解性は、先験的評価として得られる解 2 乗ノルムの非増加性 $\|\mathbf{u}\|_2 \leq \|\mathbf{a}\|_2$ を利用して、解の満たす積分方程式に基く解の上限評価を行うことにより、証明される。

但し、積分方程式 (1.3) とヘルダー不等式やヤング不等式の単純な組合せによる評価には限界があり、必要な結果は得られない。

$$(1.3) \quad \mathbf{u}_t = K_t * \mathbf{a} - \int_0^t d\tau \mathcal{P}(\partial K_{t-\tau} * \mathbf{u}_\tau \mathbf{u}_\tau)$$

例えば、単純に上式に $\|\mathbf{u}\|_2 \leq \|\mathbf{a}\|_2$ を適用すると、形式的に次の不等式が得られる。

$$\|\mathbf{u}_t\|_q \leq \|\mathbf{a}\|_q + C \|\mathbf{a}\|_2^2 \int_0^t d\tau \|\partial K_{t-\tau}\|_q$$

このとき因子 $\|\partial K_{t-\tau}\|_q$ は $c(t-\tau)^{-\frac{n}{2}(1-\frac{1}{q})-\frac{1}{2}}$ となり、 $n \geq 3, q \in (n, \infty]$ の場合、同因子は τ で積分に関して発散し、この形式的な不等式は有効な評価式を与えない。

同論文では、時間変換積分方程式 (1.4) の利用により、このような発散を回避して有用な評価式を構成することにより、時間大域可解性が証明される。

$$(1.4) \quad \mathbf{u}_t^\Phi = K_t^\Phi * \mathbf{a} - \int_0^t d\tau \mathcal{P}(\partial K_{t-\tau}^\Phi * \varphi_\tau \cdot \mathbf{u}_\tau^\Phi \mathbf{u}_\tau^\Phi)$$

上式に $\|\mathbf{u}\|_2 \leq \|\mathbf{a}\|_2$ を適用すると、次式が得られる。

$$\|\mathbf{u}_t^\Phi\|_q \leq \|\mathbf{a}\|_q + C \|\mathbf{a}\|_2^2 \int_0^t d\tau \varphi_\tau \|\partial K_{t-\tau}^\Phi\|_q$$

このとき因子 $\|\partial K_{t-\tau}^\Phi\|_q$ は $c(\Phi(t-\tau))^{-\frac{n}{2}(1-\frac{1}{q})-\frac{1}{2}}$ となり、 $n \geq 3, q \in (n, \infty]$ であっても、適当な時間変換関数 $\Phi = \Phi(t)$ の採用により、 $n \geq 3, q \in (n, \infty]$ の場合にも、同因子は τ が積分に関して発散せず、被積分因子 φ を考慮しても積分が有限確定となり、有用な評価式が得られる。

$$\|\mathbf{u}_t^\Phi\|_q \leq \|\mathbf{a}\|_q + Cc \|\mathbf{a}\|_2^2 \int_0^t d\tau \varphi_\tau \Phi_{t-\tau}^{-\frac{n}{2}(1-\frac{1}{q})-\frac{1}{2}}$$

=====